

2. 津久井町青根地区

栗原伸治¹⁾

Workshop for Regeneration and Activation in Aone, Tsukui

Shinji Kurihara

要 約

本稿は、丹沢大山の麓地域における地域住民主体での地域自立再生の可能性を実証的に探るために実施した協働的計画調査研究の成果報告である。地域再生調査チームでは、地域再生のモデル地区のひとつである旧津久井町青根地区において、地区住民との協働による再生・活性化構想づくりワークショップを計4回開催した。各回のテーマは、それぞれ以下のとおりである：第1回 青根地区の「宝」さがし—魅力の発見と、夢、課題の洗いだし；第2回 活性化ビジョン、課題とそれらに対するアクションの整理；第3回 再生・活性化構想の方向性の検討；第4回 再生・活性化計画の検討。その結果、再生・活性化のコンセプトを「ゆったりくらし じっくりはぐくむ あおね」とし、集落から山際にかけてのエリアにおける暮らしを、川沿いの拠点（「いやしの湯」）、山際、山とのつながりをもちつつ「豊か」にすることで、魅力をのばし、課題・問題点を解決してゆく、という方向性をもつ再生・活性化構想がたてられた。

(1) はじめに

A. 目的と方法

地域再生調査チームでは、旧津久井町青根地区を地域再生のモデル地区と位置づけて、調査をおこなってきた。調査としては、文献調査と、実測、インタビュー、アンケートなどの現地調査を重ねてきた。そして、それらの結果を基礎として、再生・活性化構想づくりのワークショップを地域住民との協働で開催し、その方向性について検討してきた。ここでは、このワークショップとその成果について報告する。

B. 青根地区の空間特性

青根地区は、旧津久井町の南西に位置し、袖平山、黍殻山、焼山などの連邦を背に、南は山北町、北は藤野町に接する。大部分は山岳地であり、平坦な場所は少なく、山林・原野が多い。現在、人口664人、世帯数232世帯（2005年2月現在）であり、ともに全盛期の約半分にまで減少している。

このことも要因となって、2004年から、津久井郡城山町、津久井町、藤野町、相模湖町、相模原市との合併が提案され、協議会が設置された。城山町、藤野町が反対により協議会を脱退したのをきっかけに、相模原市、津久井町、相模湖町の1市2町による「飛び地合併」に向けての協議会が設置され、3度の協議の結果、反対派を賛成派が上回り、2005年3月14日に合併が可決された。合併の期日は2006年3月20日、新市名称は「相模原市」であり、旧津久井町は現在、相模原市の「津久井町地域自治区」となっている。また、これにともない、住所表記も、「津久井郡津久井町（まち）…」から「相模原市津久井町（ちよう）…」に変更された。

青根地区の住空間は、北を流れる道志川沿いと、黍殻山北西の山麓の間にある北側の傾斜地に形成されており、北から川—集落—山際（農地）—山という断面構成になっている。また、平面構成をみると、集落が点在しており、行政界では西から音久和、上野田（上野+上原）、上青根、橋津原・東野、荒丸の5集落にわかれている。

この5つの集落について、2500分の1の白地図をもちい一つ、現地において道路と住居の実測調査、土地利用調査をおこなって、この結果とe-Tanzawaからダウンロードした航空写真により、集落図を作成した。この集落図をもとに、生活空間（人が居住し、おもに生活行為をおこなう空間）、生産空間（経済的収入や食料などの生活の糧となるものを得る空間）、山間集落ではとくに重要だと考えられる道路（古道）と水路（川）の計4つの要素によって集落空間構成をあらわすと図1のようになる。すべての集落が沢に属しており、5つの集落が古道によってつながっている。なお、青根地区にはかつて多くの水車があり、水車は日常的に利用されていた。

5集落のうち、音久和と上野田（上野+上原）・上青根については、現地調査にもとづいて詳細な集落図も作成した（図2,3）。音久和の集落空間構成は、集落の中心軸が道路（古道）であること、道路（古道）に沿って水路が流れていること、生産空間を中心として同心円状に生活空間、道路（古道）・水路が存在し、そのまわりに生産空間が点在すること、などがその特性としてあげられる。また、上野田・上青根の集落空間構成では、集落の中心軸は道路（古道）であること、道路（古道）に沿って生活空間が存在すること、集落の生産空間には水路（川）が流れていること、などがその特性としてあげられる。そして、両者の特性の共通点としては、以下のことが考えられる。①道路を中心軸とする。②中心軸の道路に沿って生活空間が存在する。③古道により集落空間が規定されている。また、中心軸の道路に沿って水路が流れている場合が多く、道路だけでなく、水路によっても集落空間構成が強く規定されている。

集落内では、近年激増している鳥獣被害の対策として設置されている防護柵が目立つ。単管パイプや異型鉄筋、ポリエチレン製のネットをつかって住民みずからの手でつくった鳥獣被害の防護柵が、音久和では計17箇所、上野田（上野+上原）では計28箇所で見られた。ともに、防護柵はとくに山際で多く確認できたが、中央の農地においてもみられた。

1) 日本大学生物資源科学部生物環境工学科

(2) ワークショップの概要

青根においては、住民参加型ワークショップを計4回開

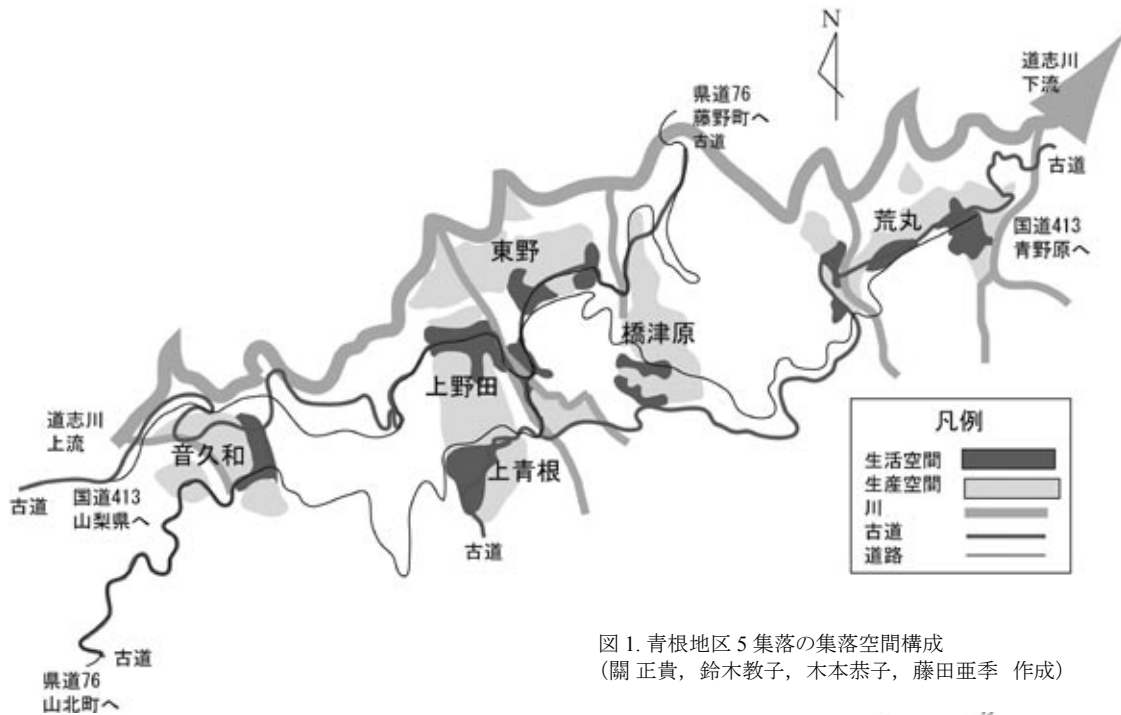


図1. 青根地区5集落の集落空間構成
(關正貴, 鈴木教子, 木本恭子, 藤田亜季 作成)

音久和集落図



図2. 音久和の集落図
(關正貴, 鈴木教子, 木本恭子, 藤田亜季 作成)



図3. 上野田・上青根の集落図
(關正貴, 鈴木教子, 木本恭子, 藤田亜季 作成)

催し、住民の方々とともに青根の住空間と鳥獣被害の現状と課題を確認し、さらにはそれらにもとづいた再生方向と具体的な構想について検討した。

計4回開催した住民参加型ワークショップの概要は、以下のとおりである。

第1回；青根地区の「宝」さがしー魅力の発見と、夢、課題の洗いだし（青根公民館2階会議室にて、2005.2.6実施）

第2回；活性化ビジョン、課題とそれらに対するアクションの整理（青根コミュニティセンター3階ホールにて、2005.7.10実施）

第3回；再生・活性化構想の方向性の検討（青根コミュニティセンター3階ホールにて、2005.11.27実施）

第4回；再生・活性化計画の検討（青根公民館2階会議室にて、2006.2.5実施）

(3)「宝さがし」と再生・活性化ビジョン

A.「宝さがし」（第1回ワークショップ、図4）

第1回ワークショップでは、青根の過去と現在の状況から、魅力の発見（宝さがし）、夢、課題の整理、宝マップづくりをおこなった。その結果、以下のようになった。

- ・魅力：歴史資源があり、人、人づきあいが良い。空気や水もよく、季節の変化を感じることができる美しい景観もあ

り、散歩が楽しめるほど自然環境が豊かである。また、有機野菜づくりも楽しむことができる。つまり、スローライフができる環境という魅力がある。

・夢：交通網を整備するとともに、自然活用型職場等の仕事場をつくり、山の価値も高めてゆく。また福祉施設を充実させて、高齢者が元気に暮らせるようにする。そうすることで人口を増やし、青根をいいところにしてゆきたい。

・課題：山林、鳥獣被害による農地の荒廃、仕事場、少子高齢化、交通などの問題があり、水を復活させつつ、休暇村を活かした地域活性化、およびそのための組織づくりが課題。

・宝マップ：「宝」となる地域資源は、青根地区全体に点在しており、なかでも川－集落－山際－山という集落立地の断面構成のなかでは、集落から山際にかけての空間でより多くの地域資源が確認できた。

B. 再生・活性化ビジョン（第2回ワークショップ、図5）

この結果を受けて、第2回ワークショップでは、歴史・文化、風景・景観、ベース・観光、山林・自然、生活環境、鳥獣被害の各項目別に活性化ビジョン、課題、それらに対するアクション、保全・活用したい場所について話し合い整理した。その結果、以下ようになった。

・ビジョン、課題、アクションのまとめ：集落から山際にかけてのエリアや小中学校、温泉などを活用しつつ、ボランティアなどをとおして育まれた人々たちによる新たな協同組織を形成する。その組織が主体となって、祭り、花火大会、合唱会、チップ活用、山の案内や狩猟ツアー、星の観察などの地域環境資源を活用したうえでストーリー性がある、登山者の通り道にならない地域づくりをしてゆく。そういった活動のなかで、人が育まれてゆく仕組みもつくってゆく。そのベースとして、酒まんじゅう、煮込みなどの郷土料理や農産物の加工販売、被害をもたらすシカやイノシシの肉の加工などにより、「儲かる仕組み」をつくってゆくとともに、人と動物の棲み分けができた集落環境をつくってゆく。

・活用・保全したい場所：活用・保全したい場所として、景観整備をしたい集落居住地は、道路に面している場所が多い。川沿いにもある。農地は、集落の周りで傾斜が緩いところに多い。里山として炭焼き等で活用・保全したい箇所は、上青根の奥の山側に集中している。水源地域として活用・保全したい箇所は、集落に近くで集落の山際に多い。動植物棲息区域は、東野を除いて山側に集中している。登山道としては、中心地から南西、南東へと延びる、軸となる二本の動線があげられた。散歩は、川沿いから山際に広がり、集落をめぐる循環コースがあげられた。

つまり、全体的には集落から山際にかけてのエリアで多く、景観整備や散歩コースにしたい箇所は川沿い、水源地域として、あるいは里山として整備し保全したい場所は山でもみられた。動植物棲息区域として保全した場所の多くは山でみられた。

これらの結果について、現地調査をおこない確認した。その結果、山際の農地が荒地になっていることが、とくに目立った。

(4) 再生・活性化構想

2回のワークショップと現地調査の結果をもとに、またこれまでと現在の青根地区での計画－丹沢大山国定公園（青

根地区）利用施設検討協議会「北丹沢文化の森整備基本計画」（1996年8月）、および神奈川県企画部土地水資源対策課「水源地域交流の里づくり計画改訂素案」（2001年～）－もふまえ、第3回ワークショップでは地域再生調査チームから再生・活性化構想の方向性を提示して検討した。そして、第4回ワークショップでは、第3回ワークショップで合意された方向性にそくした、より具体的な構想の中身について検討した。

以上のワークショップの結果、青根地区における現地調査の結果、さらにはこれまでと現在の青根地区にかかわる計画をふまえ、再生・活性化のコンセプトを「ゆったりくらしじっくりはぐくむ あおね」とした。そして、集落から山際にかけてのエリアにおける暮らしを、川沿いの拠点（「いやしの湯」）、山際、山とのつながりをもちつつ「豊か」にすることで、魅力をのびし、課題・問題点を解決してゆく、という方向性をもつ再生・活性化構想をたてた（図6）。具体的には、いやしの里、里の拠点、農の再生拠点、山際の拠点、森の再生拠点という計10のエリアを定め、それらをネットワークでつなげてゆく、というものである（図7）。そのために、「あるく、つくる、とる、みる」という行為にかかわるメニューを用意し、地区住民、来訪者を問わず、人びとはそのメニューを組み合わせて、みずから再生・活性化につながるプログラムをつくってゆく、という内容の計画である（表1、図8）。

文 献

丹沢大山国定公園（青根地区）利用施設検討協議会、1996. 北丹沢文化の森整備基本計画。
神奈川県企画部土地水資源対策課、2001. 水源地域交流の里づくり計画改訂素案。
栗原伸治、糸長浩司、關正貴、鈴木教子、木本恭子、藤田亜希、2005. 「津久井町青根地区の集落空間をめぐるブリコラージュ『丹沢大山総合調査』における地域再生研究プロジェクト その4」、2005年度農村計画学会学術研究発表会要旨集、pp.51-52。

※本稿は、以下の論文をもとに取りまとめたものである。

< 2004年度日本大学生物資源科学部卒業論文 >

鈴木教子「丹沢大山地域における野生動物被害と対策の実態と意識」

木本恭子「丹沢地域再生のための山間集落空間構成の事例的解明－山北町玄倉・津久井町青根を事例地として－」

藤田亜希「山間集落における自治組織と住民間連携意識に関する研究－藤野町篠原地区と津久井町青根地区を事例地として－」

< 2005年度日本大学生物資源科学部卒業論文 >

曾根田愛「丹沢大山地域での野生動物との緊張的棲み分け型地域活性化方策に関する研究－丹沢大山地域再生プロジェクト その5－」

竹内奈穂「上流と下流を社会・経済的につなぐシステム・施設の提案－丹沢大山地域再生プロジェクト その6－」

中平亮「ホースライディングルートプランニング：津久井町青根地区を事例として－丹沢大山地域再生プロジェクト その7－」

第二回青根ワークショップ通信 -青根活性化ビジョン、アクション、課題について-

青根地域振興協議会
「丹次大山総合調査」地域再生調査チーム
日本大学奈良研究部 2005年11月

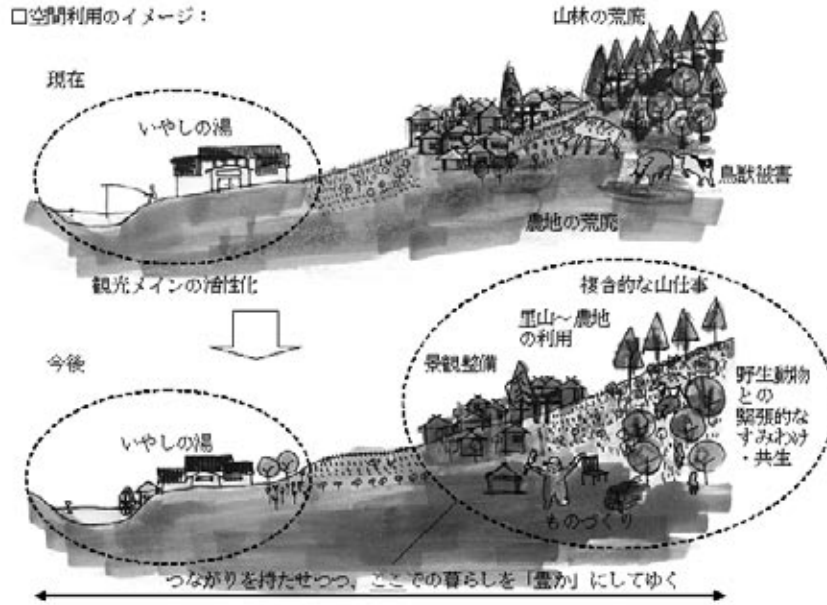
- ワークショップの主旨と概要：前回のワークショップの成果を踏まえ、青根地区の将来像をさらに具体化するために、第2回ワークショップでは、歴史・文化、風景・景観、ベース、観光、山林・自然、生活環境、鳥獣被害の項目別に活性化ビジョン、課題、それらに対するアクションについて話し合い、それぞれの整理を行いました。
- 日時・場所・参加者とグループ分け：日時・・・2005年7月10日（日）13：00～16：00
場所・・・青根コミュニティセンター
参加者・・・青根地区住民の総数（14名）
グループ分け・・・1.生活環境、鳥獣、鳥獣被害対策グループ
2.観光・ツーリズムグループ
3.なりわいグループ
- 作業・討論内容：作業A（ラベル討論）・・・それぞれの項目別に活性化ビジョン、課題、それらに対するアクションをラベルに自由に書き込み、貼り付けていく作業
作業B（地図討論）・・・景観整備、鳥獣被害、登山、水源地区、動物被害区域、登山道、散歩コース等として整備・保全したいところを地図に書き込んでいく作業
このふたつの作業を行った上で、それぞれの結果についての各グループの発表、討論を行いました。

作業A	活性化ビジョン	アクション	課題	鳥獣被害・農地管理について
歴史・文化	水・・・水車復活してそば粉をひく 湧水を「丹次天然水」のように売る わさび田復活 郷土料理・・・酒まんじゅう、煮込み、そば等 伝統・・・音楽、折花紙。	水車製作・・・水車大工がいる バス持ちの人を対象に郷土料理をつかって商売。 →「奉仕」でなく儲かる仕組み。 祭・・・花火大会・・・合気会の前夜祭	水車を作る人は？ 材料の調達・・・水、石臼、小麦、そばの栽培 官が湖の影響で水がない 魅力のなさ・・・伝説のストーリー性、登山者の 通り道にしかない	町を植えたから動物の餌がない ヒルは青根まで来てる お金を出して木を切ってもらう （処分、管理にお金がかる） 電線は草があると草刈が大変 杉・ヒノキは水源のモトにならない かやぶき技術はもうない 熊鷹単年で電線を設置している
風景・景観	道・・・全景が見えるようにしたい、いやしの道 ～旧国道～上野田サイクリングロード、 下野野登山道を明るく、わかりやすく。 花・・・家畜の餌になるものを、年間を通して 水利用できるものを。	モータバイクレンタルで道楽解消、 歩道の設置 地域のボランティアで草むしり 共同生活～共同で生産、会社を作る。	道楽・・・サイクリングには道楽が狭い、 坂道が多い、 管理問題・・・草むしりは誰がやるのか？	シカの好きなものを山の上に植える シカを山の上で育てて山の下で食べる ～シカの加工施設が必要 ～薪・・・外部資本を入れることになる ～取れるものはつくらない （一孝節、たまねぎは食べられない） リンゴ・柿・梨は食べられる ～畑を貸して、採算取れることを考える （初期費用だけかかる） ～シカの大量捕獲 ～人と動物の棲み分け
ベースとして	受け入れ施設・・・不変校舎、ディカアホーム、 温泉、そば処等、主婦、若者の 働く場。 自然観察会・・・中学校のプラネタリウムで星の 観察会。	星の観察・・・中学校で実施、外への呼びかけは 町の広報、地元で詳しい人を 育てる。望遠鏡の有効活用。 加工品販売（温泉まんじゅうとか） 意欲・・・「儲かる」もの考える。	星の観察・・・先生が必要、見る場所が狭い 予算・・・外部資本を入れることになる 個人負担が大きくなることへの抵抗 意欲・・・個人で起業する気がない	対策・農地活用 シカの好きなものを山の上に植える シカを山の上で育てて山の下で食べる ～シカの加工施設が必要 ～薪・・・外部資本を入れることになる ～取れるものはつくらない （一孝節、たまねぎは食べられない） リンゴ・柿・梨は食べられる ～畑を貸して、採算取れることを考える （初期費用だけかかる） ～シカの大量捕獲 ～人と動物の棲み分け
観光・ツーリズム	人・・・老人が最後まで働いて元気 キャンプ場の人達の考え方を取り入れる 施設・・・観光スポットとなる公園、みちの駅 整備、観光客の復活、オープンな老人ホーム 地域産・・・こけ玉、パッチワーク、うどん 登山バスの展開	温泉・・・働き場の確保、送迎バスの営業 （バスが出れば登山客も多かった） 人材・・・リーダー（おじいちゃん）確保、育成 仕組・・・小さい生態系で始めてくしかない 農産物加工 農協以外の流通システムの確立 開発・・・体験学習（種、ソバ、木、キノコ等）	人材・・・運転手が必要、リーダーの不在 住民の高齢化 アピール・・・質の向上が必要、登山マップの 改善、休憩所の活用。 その他・・・コスト、駐車スペース、各種体験 学習施設、登山者の減少	ワークショップ当日の様子
山林・自然	伝承・・・百姓の御機嫌（収穫の喜び）を若者に 伝えた。理想でなく、肌で自然を感じ ない人は育たない自然の怖さか わらない。 水を有効活用	整備・・・1つでも多くの整備が必要、針葉樹林の 混交林化～広葉樹に。荒れ地対策 イベント・・・山の案内、行楽ツアー、地元の人 による育児ツアー 寄付するという意識もある。相模原に行けば仕事 はある。知恵と技術の伝承。 チップ活用・・・薪の提案としてチップボイラー	管理・・・林地売却の意見が人によって違う。 立木が売れない。後継者でない。 少しだと補助金でない。補助金なし でも動かない。切り出し、運搬の 問題。100年たてばいい木になるが、 相続税が問題。山が売れている。 人材・・・高齢問題。やる気がなく受け継ぐ子 もない。林業技術のある若者不足	
生活環境	産しの園を農産物直売所と体験施設をまとめて ひとつの施設に 特産がほしい 小学校利用・・・木工所	ボランティア・・・知人ネットワークでボランティ ャーを募る。友人作りも兼ねる。老 者の貴重な知識を活用。 直売所拡大・・・まとめて売ると売れ行きが良い。	医療問題・・・保険、先生の確保、老人介護サ ービスをどうするか。 特産・・・医療用のタリア	

集落から山麓にかけてのエリアや小中学校、温泉などを活用しつつ、ボランティアなどを通して育まれた人達による新たな協同組織を形成する。
その組織が主体となって、祭、花火大会、景観整備、チップ活用、山の案内や行楽ツアー、星の観察など地域振興資源を活用した上で、ストーリー性がある、登山者の通り道にならない地域づくりをしてゆく。
そういった活動の中で人が育まれていく仕組みもつくってゆく。
そのベースとして、酒まんじゅう、煮込みなどの郷土料理や農産物の加工販売、被害をもたらすシカやイノシシの肉の加工などにより、「儲かる仕組み」をつくらせてゆくことも、
人と動物の棲み分けができた農産物環境をつくらせてゆくことも大切である。



図 5. ワークショップ通信第二号（關正貴，曾根田愛，竹内奈穂，中平亮 作成）（この地図は、国土地理院発行の数値地図 25000（地図画像）「上野原」を利用して作成した）



川沿い（休暇村）で観光メインの活性化がおこなわれてきた
 →山のほうにも拠点を—そのための施設や道路の計画（「北丹沢文化の森整備計画」）
 →しかし、ワークショップの結果、地域資源は集落から山際にかけてのエリアに多く存在
 また、山林、鳥獣被害による農地の荒廃、仕事場、少子高齢化など課題・問題点として
 あげられた項目も、このエリアやそれよりも上のエリアに関係することが多い
 さらには、自然環境保全のなかで、山麓における暮らしの見直しが求められている
 ⇒川沿いの拠点（いやしの湯）、山とのつながりをもちつつ、
 集落から山際にかけてのエリアにおける暮らしを「豊か」にすることで、
 魅力をのばし、課題・問題点を解決してゆく

図 6. 空間利用のイメージ（竹内奈穂 作成）



図 7. 再生・活性化の構想図（橋本忠美，關正貴，曾根田愛，竹内奈穂，中平亮 作成）
 （この地図は、国土地理院発行の数値地図 25000（地図画像）「上野原」を利用して作成した）

表 1. 再生・活性化のアクション・プログラムメニュー（案）（橋本忠美，關 正貴，曾根田 愛，竹内奈穂，中平 亮 作成）

「ゆったり暮らし じっくりはぐくむ あおね」

再生・活性化のアクション・プログラムのメニュー（案）：メニューを組み合わせ、自らプログラムをつくっていく

行為	メニュー	いつ	どこで	内容(方法)	住民、地域でできること
あるく	四季の散策	四季折々	集落～山際～山	景色を眺めながらのんびり歩いたり、レンタバイクで遠出をしたりする	景観整備(町並み)、レンタサイクル準備
	歴史散策	春夏秋冬	集落～山際	歴史、文化を自然と学び、それを伝承へとつなげる	景観、辻、景観木等の保全、マップづくり
	自然散策	日中	川～集落～山際	季節を感じ、青根の自然を愉しむ、登山者との交流。日常的に気持ちよく散歩する。手ごころな休憩所の整備	旧道と登山道をつなぐ景観づくり
	乗馬トレッキング	春・夏・秋	山際	馬に乗りながらのんびり散策する。鳥獣観音をつなぐ道づくり	林道、登山道の管理や鳥獣管理を兼ねる
つくる	森の再生	春夏秋冬	集落～山際～山	生活に青根の木材を使う、広葉樹の森の復活、都市住民と一緒に山菜、木材の有効活用、燃料としても。人と動物の棲み分けをはかる	山仕事の伝承。若者の確保。モデル里山決める複合的な山仕事技術者を育てる
	郷土料理	春夏秋冬	いやしの湯・小中学校・民家	楽しみながら地域の味という文化を伝承する(お年寄りから子供へ)	家自慢料理、料理講習会、新郷土料理開発
	ものづくり	春夏秋冬	川～集落～山際	地域資源をつかって、生活の必要を満たす。昔の技術復活、新技術開発	技術の伝承、芸術家・職人の定住促進
	炭焼きの復活	春夏秋冬	山際～山	炭窯を復活し、おじいちゃんが生き生きする	伝統的な炭窯づくりの伝承
	有機野菜づくり	四季折々	川際、山際	農業の楽しさ、やりがい伝え、豊かな青根の食文化をつくる	鳥獣被害対策を兼ねた里山～農地の利用 馬の糞づくりと馬糞の堆肥利用
	鹿・猪肉の加工	11～2月	山際	的確な駆除による獣肉食文化の開発	まずは、おいしい料理の勉強と開発
とる	狩猟	11～2月	山際～山	的確な駆除の方法、またぎをはぐくむ、昔の猟文化の復活、都市住民と一緒に	地域の猟銃会との連携、動物の習性の学習
	漁撈		川・沢・キャンプ場	魚を釣る、縛る、味わうことで水源地の河川の食文化の暮らしの再考	鼻曲がり鮎復活、地産の魚の養殖と放流
	植物収穫	春・夏・秋	山際～山	季節ごとにとれる山の幸を味わう山食文化の復活と開発	山の幸の料理レシピ開発
みる	歴史資源	春夏秋冬	神社仏閣・首塚(伝説)	祭りやおはやしを愉しみ、交流する	祭りの起源、意味を探り伝承
	コーラス	休日・夕方	ホール・野外	自然景観を生かして、子供から大人までゆったりとした時間を過ごす	山、田圃、河川での野外芸術として
	天体観測	夜	小中学校・眺望スポット	星が良く見える場所と時期探し。一斉に暗くする日をつくる	地域の小中学校との連携、星マップづくり

*1 水車、鍛冶、生地・木地、炭焼き釜、建具など
*2 昔久和の藪園、橋津原の栗林、荒井・平丸の山菜園などの既存の施設も利用
*3 眺望スポット、神社、キャンプ場内など



図 8. 再生・活性化の行動計画（案）（竹内奈穂 作成）